

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	教育学 専攻
指導教員	所属・職名		氏 名		
	文学部 教授	前田 一男		印	
自然・人文の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
研究課題	野村芳兵衛の教育実践史研究				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科教育学専攻 後期 6 年	布村 志保		印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科教育学専攻 後期 6 年	布村 志保			
研究期間	2003		年度		
研究経費	200		千円		

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は大正自由教育の担い手である野村芳兵衛（1896—1986 年）の教育への取り組みを、先行研究が対象としてこなかった戦時下あるいは戦後に至るまでを対象時期として検討し、野村の目指した教育の構造と展開を明らかにすることによって、野村研究の新たな視座を提示すること、また野村が戦後に取り組んだ幼児教育構想および実践を当時の幼児教育界に位置づけて評価を行うことを目的とする。

2003 年度は、これまで『野村芳兵衛著作集』全 8 巻（黎明書房、1973 年から 1974 年）にも収められていない多くの論考や講演メモ、講義のための資料や日記をはじめとした、従来検討されていない岐阜県歴史資料館所蔵の「野村芳兵衛氏教育資料」の整理・分類を行い、意味づけていく基礎作業を行うなかで、終戦後に本格的に取り組むことになる幼児教育についての研究をすすめる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[近代日本教育史] [幼児教育] [生活教育]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、1950年代以降の野村の教育への取り組みについて、岐阜県歴史資料館所蔵の「野村芳兵衛氏教育資料」を中心として研究をすすめた。2003年度は、以下の研究成果について発表を行い、野村の教育の特徴を明らかにした。

1. 学会発表

(1) 布村志保「1950年代の野村芳兵衛の幼児教育構想」

(教育史学会第47回大会、2003年9月21日、於 同志社大学)

①心理学を受容による生涯を通じた人間形成という視野をもって、幼児期のありようを捉えていこうとする構想という視点から検討した。講義ノートを主に野村の幼児教育構想を検討し、一点目の特徴として、野村が講義において使用した表や記載内容から、小学校低学年を含む3歳から8歳を幼児期とする認識を持った構想であることを明らかにした。

この認識は、小学校低学年のカリキュラムについて、幼稚園のカリキュラムの使用を考える等、幼児教育と小学校教育との連続(接続)を視野に含む構想となりうるものであったことを指摘した。

②特徴の二点目として、幼稚園と保育所という二つの幼児教育施設の役割について、ともに「教育機能」を持つと捉えううえで、構想を行ったことを明らかにした。

当時、「保育に欠ける」幼児を保護養育する施設として存在すると捉えられていた保育所について、野村は「家庭の保育に欠ける児童を父母に代わって家庭保育をし、同時に幼稚園でやるような友だち保育を兼ねるところ」と捉えた。そして、幼稚園と同様「友だち保育」を行う教育機能を持つ施設と捉え、両者に共通する幼児期の教育を構想していったことを明らかにした。

③そして、1950年代の野村の幼児教育の取り組みについての検討を行い、「仲間づくり」を目指した構想をしていた時期であると捉えた。野村の取り組みは、当時の幼児教育界において大きな流れとなっていく集団保育の取り組みである保育問題研究会の「話しあい保育」と生活綴方との関連という共通項をもちながら、ことなる位置にあったことを指摘した。

(2) 布村志保「野村芳兵衛の幼児教育構想」

(日本保育学会第57回大会、2004年5月15日、於 神戸親和女子大学 予定)

①高度成長が進み、親たちが早期教育に対する期待を高めて行くなかで、幼児期における自由あそびの重要性を改めて指摘し、幼児教育におけるあそびの価値を提示する理論であったことを明らかにした。また、幼児教育におけるあそびのあり方について提示することによって、知育偏重に傾いていく当時の幼児教育に対して警鐘を鳴らす理論を構築していったことを明らかにした。

②幼児はたのしくなければ動かないという特性を踏まえ、幼児教育施設における課題あそびの展開を示していく。野村はあそびを通しての教育とは、決してあそびの放任ではなく、課題あそびを通して培った能力によって、さらに高次の自由あそびへと展開し、それが連続しながら発展していくという野村独自の理論を提示していったことを明らかにした。

③野村は幼児との信頼関係を基盤とした教師によるあそびの指導を明瞭に提示しながら、しかも、教師主導の学習ではないことを的確に指摘していることを明らかにした。

2. 研究ノート

・布村 志保「高度経済成長期の家庭教育論(1)―野村芳兵衛の場合―」

『立教大学大学院教育学研究収録』創刊号、2004年、pp. 53～64

①核家族化や女性の社会進出が進んだ現在の家庭教育を考える手がかりとして、高度経済成長に伴う家庭生活や家族構成の変化のなかで示された家庭教育論について、特に祖父母に対する視点を持った野村の家庭教育論に焦点をあてて検討していった。野村は、現代の生活への適応と人間らしい生活という二点から家庭教育を考えていくが、彼の理論の特徴の一点目として、家庭の仲間づくりのなかで子どもを育て、子どもを仲間づくりの中に参加させて行くことであることを明示した。

②二点目の特徴として、仲間の子どもを仲間育てとする「共同体」の子育てを軸にした理論であることを明らかにした。そして、親や祖父母、あるいは子どもを育てることに関わる大人たちによってみんなで育てていくという野村の理論は、母親の孤独な密室育児から解放させうるものであったことを指摘した。

研究成果の概要 つづき

③野村の主張で三点目の特徴であり、かつ注目したいのは、母親の大きな役割を指摘しながらも、「愛情は育てるなかで培われる」という視点から、施設保育だからホスピタリズムになるという見解に対して否定的な立場をとるということである。

ここでは、母子のかかわりあいの重要性が、単純に「母性愛神話」や、母親が家庭にあって育児に専念すべきであるという考えに結びついていかない論理を形成していたのであることを指摘した。

④さらに、孫の教育に祖父母が参加することについて、「時間の余裕」という祖父母の持つ財産を十分に発揮することによって、子どもを育てていけるという認識をしていることを明らかにした。野村自身が孫との生活を通じて、祖父母が「先生」として、また「あそび仲間」として、孫との時間を共有していくありようを示していることを指摘した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

・ 研究ノート

布村志保 「高度経済成長期の家庭教育論 (1) —野村芳兵衛の場合—」

『立教大学大学院教育学研究収録』創刊号、2004年、pp. 53～64

④ その他

・ 大会発表

1) 布村志保 「1950年代の野村芳兵衛の幼児教育構想」

教育史学会第47回大会、2003年9月21日 (於 同志社大学)

2) 布村志保 「野村芳兵衛の幼児教育構想」

日本保育学会第57回大会、2004年5月15日 (於 神戸親和女子大学)
予定 (エントリー受理済み)

・ その他

布村志保 「野村芳兵衛の幼児教育構想」

『日本保育学会第57回大会発表論文集』
(2004年1月20日原稿提出済み)